

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 Q

その2

今回のテーマ

良い対象を探して彷徨う迫害的心性のシンジ君

前回のおさらい

新劇場版 破の最後はシンジの綾波の一途な愛を示す非常に感動的なシーンだが、これは対象の喪失が受け入れられず、悪い対象によって奪われた良い対象を取り返すという万能空想であり、妄想分裂ポジションの心性にとどまっている心性であると考えられる。

シンジの心の観点から考えたときに、「破」において、アスカが使徒になってしまったこと、そして第10使徒に綾波が飲み込まれてしまうという、相次ぐ耐え難い喪失にシンジの心が受け止めきれなくなってしまったものと考えられる。そこでシンジは再び妄想分裂ポジションの世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、激しい怒りのなかで暴走する（解離する）形で使徒を殲滅させ、最終的に綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になって（躁的防衛）「破」は終わったと思う。

一般的に躁的な心性では、悪い対象と良い対象が分割されたままの世界（つまり妄想分裂ポジションの世界にとどまったまま）であり、その世界は幻想であり、維持できるものではない。排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わる。しかし新劇場版 Q では、その後、シンジのある種、幻想的なシーン、それは躁的な心性と考えられるが、それによって起きたニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる。またシンジ自身の心も、これまで排出してきた相次ぐ喪失（これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、現実と直面し、苦悩し、もがきいている。

一般的に現実で起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで起きる徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。それは妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行であり、心の成熟である。そしてその困難さが Q では描かれているように感じられる。

先ほど、愛の中に如何に苦悩を収めるか？と書いたが、それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていくことが必要不可欠である。

しかし暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻く人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。それ故にシンジの心の成熟が阻害されてしまっているように感じられる。

2. シンジが目覚めた時、周囲の状況はどのような反応であったか？

シンジは14年ぶりに目覚めたが、鈴原サクラをはじめ、シンジを見たヴィレ内の周囲の人々は憎しみとも怯えとも怒りともつかない表情をして、シンジを見てみぬふりをして、関わろうとしない。そしてシンジはDSS チョーカーをつけられている。彼らはニアサードインパクトで彼ら自身が受けた心の痛みを消化できず、そしてニアサードインパクトを起こしたシンジに怯え、彼の存在を受け止められないでいるように感じられる。

どうしてそう状況に至ったのかは、後にリツコからDS チョーカーが装備されている説明を受ける。

リツコ：私たちへの保険。覚醒回避のための物理的安全装置。私たちの不信と、あなたへの罰の象徴です

シンジ：どういうことですか……？

リツコ：エヴァ搭乗時、自己の感情に飲み込まれ、覚醒リスクを抑えられない事態に達した場合、あなたの一命をもってせき止めるという事です。

リツコのこの言葉に表される様に、シンジを取り巻く人々が皆、殺気だち、殺伐とした重苦しい雰囲気になっており、シンジに対して、彼がまた同じことをしでかしてしまうのではないか？という強い疑念を抱いている状況である。そのようなヴィレの組織は彼の心をうけいれる環境とは到底言い難い。

1) シンジが覚醒後、アスカとの初めての対面

アスカ「あれから 14 年経ってるってことよ。バカシンジ」

シンジ「アスカ！良かった！やっぱり無事だったんだね！アスカ……」

アスカは無言のまま、シンジに殴り掛かろうとする。

アスカの拳がシンジの顔の目の前で止まる。シンジとアスカの間は強化ガラスで仕切られ、そのガラスに亀裂が走る。

アスカ「駄目ね……抑えきれない。ずっと我慢してたし……」

シンジ「……なんなんだよ……」

アスカ「怒りと悲しみの累積……」

シンジ「何のことだよ……あれ、アスカ、左目……」

アスカ「あんたには関係ない」

シンジ「アスカ……さっき 14 年って……でも、眼帯以外変わってない……」

アスカ「そう。エヴァの呪縛」

シンジ「呪縛……？ちょっと待ってよ！アスカなら知ってるだろ！ねえ、綾波はどこなんだよ！」

シンジは立ち上がってアスカを呼び止める。

アスカ「知らない」

シンジ「知らないって……助けたんだよ。あの時！」

アスカ「人ひとりに大げさね。もうそんなことに反応してる暇なんてないのよ、この世界には。そうでしょ？葛城大佐」

アスカはそう言うと、ドアの向こうへ姿を消してしまう。

シンジ「アスカっ！」

【考察】

前回の考察では、強化ガラスをシンジの自己愛的殻と考え、アスカが自分の思いを分かってという形で強い情緒をシンジに向け、殻を壊そうとして殴りかかかったと考察した。今回違った視点で捉え直してみたい。

アスカもヴィレの周囲の人々と同じ様に強い怒りの感情を持っている。しかし彼らと違って、アスカはシンジに殴りかかろうとし、シンジとアスカを隔てる強化ガラスに亀裂が走る。

しかしアスカの心はヴィレと同じ様な感情だけではないと感じられる。

アスカはシンジに対して色々な感情をもっていたと考えられる。一つにはシンジのことが好きで、再会を喜ぶ気持ちもあった様に感じられる。しかしその一方で、アスカ、シンジ、綾波という三者の関係で考えた時に、シンジは勿論アスカの喪失に対して非常に怒りと悲しみの感情を感じていたと思うが、シンジは綾波を失った時に助け出し、綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な幻想の中に入っていた。もしそこにアスカが生きていたら、どう感じていただろう。アスカはそのシンジと綾波という強い結びつきから疎外され、アスカ自身もシンジにとっての悪い対象となり、ニアサードインパクトに巻き込まれてしまう、その強い怒りと悲しみを感じていたのではないだろうか？

そしてアスカが殴りかかったのはその色々な思いをシンジに受け止めてもらいたかった部分があったのではないだろうか？

しかしシンジは純粹にアスカが生存していることを心から喜んだが、アスカのその思いを全く理解できず、周囲とヴィレの人々と同じ様に、最終的にアスカを迫害的対象と捉えてしまっている。

その断絶が1枚の強化ガラスに二人が隔てられている様にこのシーンでは描かれている様に感じられる。

→シンジは周囲が自分を受け入れていないと感じ（シンジが周囲に対して迫害的に捉えている）、綾波の導きに従うように、今いる WILLE の場から出て綾波という良い対象がいるという幻想を抱き、父のいる NERV に向かったと考えられる。

それは、まさに序で第五使徒を倒した後のシンジとミサトのやりとりで、葛城ミサトに対して迫害的対象ととらえ、第3新東京市から出て行こうとしたシーンと重なる（反復強迫）。

ここでも、シンジは周囲に対して迫害的に感じ、以前の心性に退行しているようにも感じられる。

綾波が操縦する0号機にシンジが乗り込み、飛び立った後にアスカが言った言葉が非常に印象的である。

アスカ「ふん、あれじゃあ、バカじゃなく……ガキね」

→破で「バカ」とアスカが言うのは同じエディプス葛藤にいる嬉しさと照れ隠しだと伝えたが、シンジの心性はそこにおらず（バカじゃなく）、退行している（ガキね）と言っているように感じられる。

3. NERV に戻ったシンジはどうなったのか？

1) NERV でのシンジの生活はどんなことを象徴しているのか？

綾波の誘いから NERV 本部に戻ったシンジだが、「ジオフロントなのに、空が見える……」状態でボロボロで朽ちた NERV の状態に「ホントに 14 年も経ってるんだ……」と感慨深くなる。（この世界そのものが彼の心性の象徴 cf：序の綾波の部屋）

そしてしばらく何も無い、ただ広い、シンジ側からはかけられない電話が置いてある殺風景な部屋で、シンジは味気ないペースト状の食べ物（離乳食を彷彿とさせる：口唇期→肛門期か？）を日々の食事をしている。

→以前の序の冒頭部の頃のように、受け身的で感情のないシンジに戻ってしまったこと象徴しているように感じられる。

しかし

シンジ「やっぱり、お礼言っておかなきゃ」

→この状況を変えた思いもシンジ自身には残っている。

2) 綾波との関わりでシンジはどのように感じたのか？

シンジ「綾波？ やっと見つけた！」

シンジは綾波の部屋に入るが、殺風景で屋根もなく部屋の程をなしていない。

シンジ「綾波！ ずいぶん探したよ……」

シンジ「おっ、ああっ！ ちょ……服、なっ、なんか服着てよ！」

綾波「命令、ならそうする」

シンジ「は、入るよ……」

シンジ「あの……綾波、これ、ありがとう。……ずっとお礼言いたかったんだ」

シンジは、音楽プレイヤーを綾波に見せた。しかし、綾波は無表情のまま。

シンジ「プラグスーツ、新しくなったんだ。似合うけど、黒だとちょっと……」

綾波「……」

シンジ「なんだか、ずいぶん変わっちゃったんだね。ネルフ本部……」

シンジ「なんでミサトさんは使徒じゃなくてネルフと戦ってるんだ……」

シンジ「父さんはここで何する気なんだ」

シンジ「みんなどうしちゃったんだろう……ねえ綾波は何か知らないの？」とシ綾波「……知らな

い」

シンジ「そっか……うん。そうかもな。……ねえ、綾波はいつ初号機から戻ったの？」

綾波は無言のまま答えない。

シンジ「ここは部屋にもなってないよ……。綾波らしいと言えばそうだけど、学校とかなさそうだし、いつもどうしてるの？」

綾波「命令を、待ってる」

シンジ「……ここ、本もないんだ。本とか読んでないの？」

綾波「本……『綾波レイ』なら、そうするの？」

シンジ「うん……よく読んでたじゃないか。部屋にもあったし」

綾波「そう……」

シンジ「そうだ、本、ここの図書室で探して持ってくるよ！あの、英語の本がいいかな。いつも持ってた、好きみたいだし」

綾波「好き？」

シンジ「うん……だと思うけど……」

綾波「好きって、何……？」

【考察】

このシーンと序でシンジが初めて綾波の部屋に行って、綾波に遭遇し、その後二人の交流が深まっていくシーンと対比してみると興味深い。序と同じようにシンジは、当初、積極的に綾波に声をかけていき、シンジ自身が周囲に対して抱いている思いをぶつける。しかし以前のように綾波はシンジの思いを受け止め、返答する感じはない。何も状況をわかっておらず、記憶もない感じの綾波の応答に、シンジは次第に綾波を気にかけるような発言へと変わっている。

これはシンジにとって綾波という存在が、以前のように自分の思いを受け止めてくれる存在ではなくなってしまったのではないか（シンジ自身が抱いてきた良い対象ではなくなってきている）？という喪失と不安な思いから出ているように感じられる。

そしてシンジは綾波が自分を守ってくれる唯一の良い対象と捉えてきたが、そうではないと認識しはじめている。

「ダメだ。動かないや……」

音楽プレイヤー色々動かそうとしても、壊れて動かなくなっている。

→移行対象としての機能を果たさなくなっている象徴。

そしてシンジは横になると今まで言われたこと何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

支えのなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと思っていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も移行対象にならなくなっていると感じているシンジは、支えを失い、孤独を感じていたと感じられる。そのなか、渚が彼をピアノの連弾に誘い出す。

1) 渚カヲルはどんな人物なのか？

「君（シンジ）と同じ運命を仕組まれた子ども」と自己紹介する。

常に柔和な笑みをたたえ、感情を出すことはほとんどなく、ミステリアスで達観している感じさえする。その点が綾波レイと似ているようにも感じられる。

そのカヲルがシンジにピアノの連弾を誘う。全くピアノを弾いたこともないシンジは戸惑うが、それにカヲルはコメントする。

カヲル「ピアノの連弾も音階の会話さ。やってみなよ」

シンジ「いいよ。僕には無理だよ」

カヲル「生きていくためには、新しいことを始める変化も大切だ」

その後カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

シンジ「音が楽しい。二人ってすごいね」

カヲル「簡単さ。君はこっちで鍵盤を叩くだけでいいんだ」

カヲル「さ、弾いてみなよ」

カヲル「いいね、いいよ、君との音」

カヲル「音が楽しい。二人ってすごいね」

シンジ「ありがとう。なんだか久しぶりに楽しかったよ」とシンジは言った。

カヲル「僕もさ。またやろう。いつでも来てよ。碇シンジ君」

シンジ「うん。あの、君は……」

カヲル「僕はカヲル。渚カヲル。きみと同じ、運命を仕組まれた子供さ」

この会話のやり取りから、カヲルは殻に閉じこもろうとするシンジに殻を破り、外界で人と深く情緒的に関わること（それがアンサンブルだと考える）が非常にイキイキとした彩りを持つものなのだということを水先案内人のようにさし示しているように感じられる。

→設定ではシンジの理想化された対象とも言われており、シンジ自身が抱いてきた内的な（理想的な）父の象徴のようにになっている。

2) 渚カヲルと関わることで、シンジの心はどのように変わっていったのか？

シンジはカヲルと関わることで彼とピアノの連弾を通じて、深く情緒的に関わっていく。

綾波の部屋に向かったが、綾波がおらず、シンジが置いていった本も手付かずのままで、シンジはそこに新しい本を重ねておいた後のシンジとカヲルの2回目の連弾のシーン

カヲル「おはよう。碇シンジ君。今日ははやいね」

シンジ「他にすることがないから……」

そして、二人はピアノの前に腰を下ろして連弾を始める。

カヲルの奏でる旋律に、シンジがしっかりと付いて行く。

シンジ「どうしたらもっとうまく弾けるのかな」

カヲル「うまく弾く必要はないよ。ただ気持ちのいい音を出せばいい」

シンジ「じゃあ、もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」

カヲル「反復練習さ。同じことを何度も繰り返す。自分がいいなって感じられるまでね。それしかない」

【考察】

シンジが「うまく弾く」コツを尋ねたときにカヲルは「気持ちのいい音を出せばいい」と言っている。そこでは、なにか周囲に対してうまく振る舞う必要はないと言っており、そのことに加えて、自分が心地のよいと感じられることに目を向けていくことの大切さを伝えている。

これは序においてシンジ自身は傷つかないように自己愛的殻を作って、非常に物分かりの良い子人のように接してきたと考えられるが、Q ではまた序における初めのシンジに戻りつつあるように感じられる。その中でカヲルは人と交流することの中で大切なことは、そのように外面を磨いていくことは必要ないこと、自分が心地よいと感じることを追求していけばいいと伝えているように

感じられる。

しかしそれは自身の欲望に身を委ねることではない。シンジは「もっといい音を出したいんだけど、どうすればいい？」と尋ねている。それは社会の中で自身が心地よくイキイキと感じながら他者と関わっていくことはどうすればいいとカヲルに質問している。それに対してカヲルは「反復練習」の重要性を説いている。楽器の演奏でもスポーツでも反復練習と非常に重要（cf. 1万時間の法則）だが、自分のこれだと思えるものをとことん追求していく、ひいてはそのことが自身に磨きがかかることにも繋がっていると言っているように感じられる。

この会話のやり取りが連弾の中で交わされていることが大切。連弾で関わること喜びを一緒に考えながら、より深い喜びを得られるには何が大切か？ということを伝えている。